



Title	老年人的超越理論に関する一考察：実証的研究と批判の動向
Author(s)	中川, 威
Citation	生老病死の行動科学. 2008, 13, p. 93-102
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/7835">https://doi.org/10.18910/7835</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 老年的超越理論に関する一考察：実証的研究と批判の動向

### A study of the theory of gerotranscendence: A review of empirical researches and criticisms

(大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程) 中 川 威

#### Abstract:

This article reviewed empirical researches and criticisms about the theory of gerotranscendence. The first aim was to outline Tornstam's theoretical researches and to review the other empirical researches in order to elaborate the theory of gerotranscendence. Secondly, this article aimed to organize the research issues by referring to criticisms toward the theory. In conclusion, the relationship between gerotranscendence and each trend of empirical researches was not fully explained in a theoretical way. For the future, following three issues were suggested to need examining. First, in order to illustrate relationships between gerotranscendence, biological and sociocultural factors, theoretical and empirical researches have to search and verify relevant factors, and should explain the relationships theoretically. Secondly, future research ought to study what kinds of theories each sign is based on, by focusing on the formation process of the theory. Finally, it is necessary to investigate how gerotranscendence fits in quality or quantity among cultures.

Key words: gerontology, gerotranscendence, theory of aging.

#### I. 背景及び目的

日本における平均寿命は伸長を続けている。2007年の平均寿命は男性78.56歳、女性85.52歳であるが、今後男女とも引き続き延びて、2055年には男性83.67歳、女性90.34歳となると見込まれている（内閣府，2007）。また、同年には総人口に占める後期高齢者の割合は26.2%に達し、4人に1人が後期高齢者になると予測されている（ibid.）。一連の変化に伴い、加齢に伴う認知・身体機能の低下が見られる高齢者の増加も予見されている。この現状と予測を受けて、現在のサクセスフル・エイジングのモデルが問い直されつつある。

現在のサクセスフル・エイジングのモデルは認知・身体機能の維持、社会参加を中心的な要因として展開されているが（Rowe & Kahn, 1997）、近年注目を集め始めている老年的超越 Gerotranscendence 理論は必ずしも身体機能の維持、社会参加を重視しない。そのため、老年的超越はもう一つのサクセスフル・エイジングとも考えられており、現在のサクセスフル・エイジングを問い直す上で重要な示唆を与えることが期待されている（Flood, 2002; 中畠・小田, 2001）。しかし、老年的超越理論はいまだ発展途上であり、理論に対する評価は定まっていない。それゆえ、老年的超越理論の精緻化に向けた実証的・理論的研究が現在求められている。

本稿の目的は、老年的超越理論の精緻化に向けた展望を示すため、まず理論の提唱者である Tornstam による理論的研究について述べ、実証的研究の動向を概観することである。次

に、老年的超越理論への批判を取り上げ、研究課題を整理することを目的とする。

## Ⅱ．老年的超越に関する理論的研究

老年的超越は高齢期を説明する新たな理論として知られており (Schroots, 1996)、その理論的研究はスウェーデンの社会学者 Tornstam による理論の提唱に端を発している (Tornstam, 1989; 1992; 1994; 1996a)。そこでまず、老年的超越に関する理論的・実証的研究を進める上で、理論の生成過程及び Tornstam の学問的背景に留意しておく必要があるだろう。

Tornstam (1989) は Cumming & Henry (1961) が提唱した離脱理論を再定式化し、精神分析学や禅の知見を取り入れることで、老年的超越理論を生成した。つまり、老年的超越は少なくとも3つの異なる理論を基に構築されていると言える。また、各理論は社会学、心理学、禅学という異なる背景を持つ研究者及び宗教者によって構築されてきた。なお、老年的超越理論の生成過程については、中嶋他 (2001) による展望論文が参考になる。

引き続き、老年的超越の概念定義について考察する必要がある。Tornstam (1989) の概念定義は以下のようになされている。すなわち、「物質的で合理的な世界観から、宇宙的で超越的な世界観への、メタ認識における移行」である。この移行に伴い、生活満足感が高まると仮定されている。この概念定義が指している現象とは、高齢期になると壮年期における世界観や暮らし方とは質的に異なる世界観や暮らし方に変化するというものである。Tornstam (2005) によれば、人は幼児期には自己と他者などの概念の境界が曖昧とした超越を示すが、加齢に伴い境界が形成される。しかし、高齢期には、それまでの人生における経験が包含されながら、再び境界が曖昧になる超越への過程を示すと考えられている。

老年的超越の徴候について、Tornstam (1997a) は老年的超越が3つの領域から構成されることを示し、各領域に含まれる徴候を以下のように記述した。

### 宇宙的領域 *The Cosmic Dimension*

- ・時間と子ども時代：時間の定義が変化し、子ども時代に戻る。過去と現在の境界の超越が生じる。
- ・過去の世代とのつながり：過去の世代への親密感が増す。個人間のつながりから世代間のつながりへの見方の変化を自覚する。
- ・生と死：死の恐怖が減少し、生と死に対する新たな認識が生じる。
- ・生命における神秘：生命における神秘的な領域を受け入れる。
- ・喜び：大きな出来事から些細な経験に喜びを感じる。小さな宇宙の中に大きな宇宙を経験する喜びが現れる。

### 自己の領域 *The Dimension of the Self*

- ・自己との対面：自己の隠された側面 - 良い面も悪い面も - を発見する。
- ・自己中心性の減少：最終的には、世界の中心から自己を取り去ることができるようになる。
- ・身体の超越の発達：身体の世話は続けるが、身体にはとらわれなくなる。
- ・自己の超越：利己主義から利他主義へと移行する。
- ・自我の統合：人生のジグソーパズルの一片一片が全体を形作ることに気付く。

### 社会的・個人的関係の領域 *The Dimension of Social and Personal Relationships*

- ・ 関係の意味と重要性の変化：表面的な関係に対して選択的になり、関心が減少する。また、一人でいる時間の必要性が増す。
- ・ 役割：自己と定められた役割との違いを理解する。時には役割を放棄しようとする。
- ・ 解放された無垢：無垢が成熟を高める。必要ない社会的慣習を超越する新たな力である。
- ・ 現代的禁欲主義：財産の重さを理解しつつ、禁欲主義から自由になる。現代の定義での生活必需品を十分に持ち、それ以上は持たない。
- ・ 日常の知恵：善悪の表面的に区別することに気が進まなくなり、判断や助言を控えることを認識する。善悪二元論を超越し、幅広い考え方と寛容さが得られる。

老年的超越の発達に伴い、以上のような徴候が見られると仮定されている。理論上、老年的超越は「自然な加齢」に伴って発達するとされており、すべての高齢者にこれらの徴候が現れると仮定されている。しかし現実には、すべての高齢者が自動的に老年的超越に向かうわけではないだろう。高齢者の中には、これらの徴候を全く示さない者もいると考えられる。老年的超越に関する実態を明らかにするためには、実証的研究を進める必要がある。

そこで次節において、老年的超越に関する実証的研究の動向を概観する。

### Ⅲ. 老年的超越に関する実証的研究

老年的超越に関する実証的研究は多くはないが、老年的超越を高齢期におけるスピリチュアリティの発達理論と位置付ける一連の研究が確認されている (e.g., Ahmadi, 2000; Atchley, 1999; 2006; Braam, Bramsen, van Tilburg, van der Ploeg & Deeg, 2006; Dalby, 2006)。なお、Braam et al. (2006) は、老年的超越とスピリチュアリティとが関連する根拠として、Tornstam (1994; 1997b) が開発した老年的超越尺度の下位因子である宇宙的超越に含まれる項目が、Piedmont (1999) のスピリチュアリティ尺度の項目と類似していることを指摘している。しかし、Dalby (2006) が指摘するように、Tornstam は老年的超越とスピリチュアリティとの関連を理論的・実証的に説明してはいない。

また、老年的超越理論は活動理論と離脱理論との対立を止揚する試みとして生成されたが (中嶋他, 2001; Tornstam, 1989; 1992)、老年的超越を高齢期の社会活動を説明する理論として位置付ける研究は限られている (Adams, 2004; Shaw, Krause, Liang & Bennett, 2007; Tornstam, 1994)。むしろ、アメリカの心理学者 Carstensen が提唱する社会情緒的選択 Socioemotional Selectivity 理論が高齢期の社会活動を説明する理論として同様に引き上げられている (Adams, 2004; Shaw et al., 2007)。さらに、Tornstam (1994) によれば、老年的超越が発達すると社会活動は減少するという仮説に反し、社会活動は増加するという結果が示された。この結果によって、老年的超越は離脱とは異なる概念であるという仮説が支持されている (ibid.)。しかし、老年的超越が社会活動を増加させる個人内の過程については理論的に説明されていない。

次に、老年的超越はエリクソンの発達段階理論における第9段階であるとする仮説が提起されたが (Erikson & Erikson, 1997)、この仮説に関する実証的研究もまだ限られている (Brown & Lowis, 2003; 星野, 2006; Nilsson, Sarvimäki & Ekman, 2001)。また、Tornstam (1994) は、老年的超越とエリクソンの発達段階理論における統合とが異なる概念であ

ることを理論的に説明しているに過ぎず、第8段階の統合から第9段階の老年的超越への発達過程について明確には説明していない。

上述のように、老年的超越理論は高齢期におけるスピリチュアリティ、社会活動、心理社会的発達を説明する理論として取り上げられているが、各研究の動向においても実証的研究は限られていると言える。また、各研究の動向における老年的超越の位置付けに関して、十分に理論的に説明されているとは言えない。

なお、Tornstam も老年的超越に関する実証的研究を進めてきた。まず、老年的超越を測定する尺度を開発し、老年的超越の関連要因を明らかにしてきた (Tornstam, 1994; 1997b)。さらに、老年的超越の発達過程を解明するため、老年的超越の発達が「自然な加齢」だけでなく、死別や離別、疾患罹患といった人生の危機 Life Crisis によっても促進されることを実証的に示してきた (Tornstam, 1997c; 2003)。

しかし、個人内における老年的超越の発達過程は十分に説明されていない。Tornstam (1999) は回想の機能によって老年的超越の発達過程を説明しようと試みた。この中で、回想は次の2種類の機能を持つことが仮定されている。すなわち、アイデンティティの統合を促進する機能とアイデンティティの再構築を促進する機能である。結論として、個人内における老年的超越の発達過程において、回想のこれら2種類の機能が絡まり合って作用することが指摘されるに留まっている (ibid.)。

最後に、Tornstam の共同研究者らを中心とする研究の動向が確認されている。Ahmadi-Lewin (2001) は老年的超越の文化を超えた普遍性を検討しているが、今後の課題として方法論を挙げている。この研究は老年的超越に関して国際比較を行った数少ない研究であるが、質的研究によって生成された一連の仮説は、今後量的研究によって検証されなければならないだろう。

また、老年的超越理論を基にケアのガイドラインを作成する応用研究が行われてきた (Tornstam, 1996b; Tornstam & Tornqvist, 2000; Wadensten, 2006; 2007a; 2007b; 2007c ; Wadensten & Carlsson, 2001; 2003)。しかし、このガイドラインに対する評価は十分には行われていない。それゆえ、老年的超越に関する応用研究も今後取り組まれる必要があるだろう。

以上のように、本節では、老年的超越に関する実証的研究の動向を概観し、どの研究の動向においても老年的超越との関連は理論的には十分に説明されていないことを指摘した。次節では、老年的超越理論への批判を取り上げ、研究課題を整理する。

#### IV. 老年的超越理論への批判

本節では、老年的超越理論への批判として、Hauge (1998)、Jönson & Magnusson (2001)、Thorsen (1998) の3つを取り上げる。これらの批判は、スウェーデン及びノルウェーでなされてきた。また、看護学及び社会学から検討されている。しかし、他の文化圏からの批判や、心理学及び禅学からの批判はほとんど見られず、本稿では取り上げなかった。なお、これらの批判を受け、老年的超越理論は徐々に修正がなされている (Tornstam, 2005)。

##### 1. Hauge (1998) による批判

まず、Hauge (1998) は看護学の立場から老年的超越理論への批判を行った。しかし、彼

女自身が認めているように、看護学からの批判は必ずしも適切とは言えない。例えば、老年的超越理論は臨床における問題の原因を直接的には説明しないため、この点への批判は不適切である。

第一の批判として、老年的超越理論は、生涯に渡る超越を説明するのか、高齢期における超越を説明するのか疑問が示されている。理論上、人は壮年期には物質的で合理的であるが、高齢期には宇宙的で超越的に変化すると仮定されている。しかし、実証的研究からは壮年期においても超越が見られることが示されている。この批判は、老年的超越の発達過程が不明確であることと、壮年期における超越と高齢期における超越の質的な差異あるいは類似が不明確であることに起因すると考えられる。

第二の批判として、老年的超越の発達過程は主に生物学的要因によるのか、主に文化・社会的要因によるのかと述べられる。理論上、老年的超越は「自然な加齢」に伴って発達すると仮定されている。一方で、文化・社会的要因によってその発達が促進されたり、阻害されたりするとも考えられている。しかし、生物学的要因と文化・社会的要因とがどのように老年的超越に関連するか、Tornstam は明確には説明していない。

最後の批判として、Tornstam 自身のパラダイムと老年的超越理論に一貫性がないのではないかと指摘されている。老年的超越理論は従来の老年学における実証主義を批判しているにも関わらず、Tornstam (1994; 1997b) は質問紙を用いた量的研究によって仮説の検証を行ってきた。Tornstam (1992) は、新しいパラダイムの出発点として現象学や人類学といった質的研究が有効かもしれないと述べており、矛盾が見られる。

## 2. Jönson & Magnusson (2001) による批判

次に、Jönson & Magnusson (2001) は社会学の立場から老年的超越理論への批判を行った。彼らは、理論には2つの問題があると指摘している。すなわち、本質主義と個人主義であり、これら2つの問題に関連する批判を行っている。

第一の批判として、老年的超越理論における仮説は反証可能性が低いと指摘されている。「すべての高齢者は老年的超越に向かう」という仮説は、「すべての高齢者は老年的超越に向かわない」というデータによって反証され得るが、この説明には障害仮説が用いられている。障害仮説とは「老年的超越の徴候が見られないのは、文化・社会的要因が障害となっているからである」というものである。この仮説に従えば、ある高齢者に老年的超越の徴候が見られない場合、文化・社会的要因によって老年的超越の発達が阻害されているだけで、本来ならその徴候が見られるはずだと説明されることになる。老年的超越の発達は生じていないとは結論付けないのである。この意味で、反証可能性が低いと批判されている。また、こうした ad hoc 仮説は随所に見られる。例えば、74 歳から 100 歳にかけて老年的超越が増加しないという結果が示されているが (Tornstam, 1994)、壮年期から老年的超越が発達するためだと説明されている。

第二の批判として、Hauge (1998) と同様に、Tornstam が現象学を理論の出発点とすべきだと述べながら、実証主義的パラダイムに基づく量的研究を行ってきたことが挙げられている。つまり、方法論とパラダイムの一貫性のなさが批判されているのである。

第三の批判として、Torsntam は禅の知見を理解してはいないと指摘されている。Tornstam (1989) は、従来の老年学における否定的な高齢者像を、禅学における肯定的な

高齢者像と対比させることで、新たなパラダイムの可能性を示した。しかし、Tornstam は 禅の知見に言及しているものの、ユング派精神分析学者 Fromm が解釈した、鈴木大拙による 禅の知見を参照しているに過ぎないと批判されている。実際、理論の生成過程において 禅の知見に関する参考文献は挙げられていなかったが (ibid.)、後に Fromm の著作が追加されている (Tornstam, 2005)。

これらの批判の原因として、個人主義と本質主義が取り上げられている。まず、Tornstam は個人主義的見方を強調したために、老年的超越を促進する要因を個人内に求め、文化・社会的要因は老年的超越の発達を阻害するものとみなしているのではないかと述べられている。すなわち、個人主義が第一の批判の原因と考えられる。

さらに、Tornstam は本質主義的見方を強調したために、「西洋の人々」と「東洋の人々」は異なる、壮年期と高齢期は異なる、という規範が生じているのではないかと述べられている。すなわち、本質主義が加齢を画一化してとらえる規範を促し、第二及び第三の批判の原因になっていると考えられる。すべての高齢者が老年的超越の徴候を示すと仮定されるならば、量的研究を行うだろう。また、東洋における高齢者像が老年的超越の徴候を示しているとするならば、それ以外の多様な高齢者像を想定しないだろう。

### 3. Thorsen (1998) による批判

最後に、Thorsen (1998) もまた社会学の立場から老年的超越理論に対する批判を行った。彼女は特に文化社会学の立場から論じており、Jönson & Magnusson (2001) と同様に、本質主義を批判している。以下では、8つの批判を取り上げる。

第一の批判として、老年的超越理論は本質主義と社会構成主義という互いに矛盾する理論に基づいている指摘されている。さらに、「自然な加齢」に伴う老年的超越の発達過程は、生物学的要因だけでなく、「自然」の基準を構成する文化・社会的要因とも関連しているのではないかと述べられている。それぞれの要因は互いに矛盾する理論に基づくと考えられているため、老年的超越理論においてそれらが統合されている論拠が明らかではないと批判されているのである。

第二の批判として、老年的超越は形而上学的なメタ状態を意味するのか、それはいかなる状態なのかと疑問が示されている。また、もしメタ状態が宇宙的領域の徴候を指しているなら、この領域に含まれる徴候は文化によって異なるだろうと指摘されている。例えば、神仏や自然のような概念は文化によって多様だろう。

第三の批判として、高齢者は物質性から離脱するのか疑問視されている。高齢者は消費しないが、預金を持っている。したがって、壮年期における物質を消費する欲求が、高齢期において物質を所有する欲求に変化しているのではないかと批判されている。

第四の批判として、老年的超越は新たな合理性なのか、情動性なのか不明確であることが挙げられている。例えば、老年的超越に向かうことで「失ったものが大切でなくなり、まだ持っているものが大切になる」ならば、これは新たな合理性と言えるのではないだろうか。また、老年的超越はフロー体験と類似しており、これは情動性との関連を示しているかもしれない。いずれにせよ、老年的超越がどのように認知及び感情と関連しているかは明らかではない。

第五の批判として、老年的超越の発達が急な変化なのか、緩やかな変化なのか不明確であると指摘されている。理論上、老年的超越は「自然な加齢」に伴う変化と仮定されている一方、

死別や離別といった人生の危機によっても生じると仮定されている。これは、ただ発達過程が異なることを意味するのだろうか。または、最後には互いに異なる状態に至ることを意味するのだろうか。

第六の批判として、老年的超越における自己中心性の減少は、近代からポストモダンへの移行に伴う自己の概念の社会的変容の結果なのではないかと述べられている。すなわち、自己中心性の減少が、高齢期に特有の徴候ではなく、すべての世代に生じている徴候ではあるのではないかという批判である。

第七の批判として、老年的超越は身体あるいはジェンダーを無視しているのではないかと疑問が示されている。身体の超越や宇宙的領域の徴候は身体を時間とは無関係な対象とみなすため、加齢に対する歴史や文化による影響を無視することにつながると懸念されている。

最後の批判として、老年的超越は規範的であると述べられている。例えば、すべての高齢者が老年的超越に向かうと仮定されるならば、活動的な高齢者は活動を控えるべきなのだろうか。加齢の過程は複数あり、老年的超越はその一つを説明するに過ぎないと批判されている。

以上のように、本節では、老年的超越理論への3つの批判を取り上げた。各批判の立場は互いに異なり、批判の対象は理論の生成過程、パラダイム、仮説、方法論など、多岐に渡っている。次節では、ある程度共通する批判から研究課題を整理し、今後の展望を述べる。

## V. 老年的超越理論の課題と展望

本節では、各批判に答えるためではなく、ある程度共通する批判に答えるための研究課題を整理する。

前節で共通して批判されているのは、老年的超越と生物学的要因及び文化・社会的要因との関連である。老年的超越は「自然な加齢」だけでなく人生の危機によっても発達すると仮定されているが、いまだ十分には説明されていない。したがって、老年的超越に関する理論的研究を進め、発達過程や阻害要因を整理するとともに、老年的超越の関連要因を探索・検証し、各要因との関連を説明していくことが今後の研究課題の一つとして挙げられるだろう。

次に、老年的超越は少なくとも3つの異なる理論から構築されていることはすでに述べたが、理論によって生物学的要因とより関連しているか、文化・社会的要因とより関連しているかは異なると考えられる。例えば、離脱理論では、生物学的要因及び文化・社会的要因と老いとの関連を仮定している。一方、精神分析学においては、文化・社会的要因よりも内的な心理的要因と老いとの関連を仮定している。さらに、禅学では、因果関係そのものを否定するパラダイムに移行する。ゆえに、どの理論に基づいた徴候であるかによって、関連要因や影響の程度、メカニズムは異なると考えられる。したがって、老年的超越理論の生成過程に着目し、老年的超越の徴候がどのような理論に基づくか検討することも今後の研究課題の一つとして挙げられるだろう。

さらに、老年的超越理論におけるパラダイムと方法論との矛盾が批判されていた。この批判は、老年的超越を文化を超えた普遍的な現象とみなすか、文化によって相対的に異なる現象とみなすか、理論的立場の相違に起因していると考えられる。ただし、実証研究の動向で取り上げた Ahmadi-Lewin (2001) が指摘しているように、老年的超越の解明には量的研究と質的研究の両方が必要になると考えられる。老年的超越が文化によって質的あるいは量的



にどのように異なるかはほとんど明らかではないためである (ibid.)。したがって、研究課題によって方法論を選択していくことが、批判に対する反論を可能にするだろう。

最後に、これまでの議論をまとめ、今後の展望を述べる。

本稿の目的は、老年的超越理論の精緻化に向けた展望を示すため、まず理論の提唱者である Tornstam による理論的研究について述べ、実証的研究の動向を概観することであった。次に、老年的超越理論への批判を取り上げ、研究課題を整理することを目的とした。実証的研究の動向を概観したところ、老年的超越に関する実証的研究は散見されるが、どの研究の動向においても老年的超越との関連は理論的に十分に説明されているとは言えないことが明らかになった。また、老年的超越理論への批判から次のような3つの研究課題を整理した。まず、老年的超越と生物学的要因及び文化・社会的要因との関連が不明確であるため、老年的超越の関連要因を実証的に探索・検証し、その関連を理論的に説明していくことが第一の課題として挙げられる。次に、老年的超越理論は複数の理論から構築されており、各徴候がどのような理論に基づくかによって関連要因や影響の程度、メカニズムは異なると考えられる。したがって、理論の生成過程に注目し、各徴候がどのような理論に基づくか理論的に検討することが第二の課題として挙げられる。最後に、老年的超越は文化を超えて普遍的に見られる現象と仮定されているものの、文化・社会的要因によって老年的超越の発達が阻害されるとも仮定されている。ゆえに、老年的超越が文化によって質的あるいは量的にどのように異なるか検討することが第三の課題として挙げられる。

## 引用文献

- Adams, K. B. 2004 Changing Investment in activities and interests in elder's lives: theory and measurement. *International Journal of Aging and Human Development*, **58**, 87-108.
- Ahmadi, F. 2000 Reflections on Spiritual Maturity and Gerotranscendence: Dialogues with Two Sufis. *Journal of Religious Gerontology*, **11**, 43-74.
- Ahmadi-Lewin, F. 2001 Gerotranscendence and Different Cultural Setting. *Ageing and Society*, **21**, 395-415.
- Atchley, R. C. 1999 Goals for developmental direction. In *Continuity and adaptation in aging: Creating positive experiences*. Baltimore: Johns Hopkins University Press. Pp. 133-146.
- Atchley, R. C. 2006 Continuity, Spiritual Growth, and Coping in Later Adulthood. *Journal of Religion, Spirituality & Aging*, **18**, 19-29.
- Braam, A. W., Bramsen, I., van Tilburg, T. G., van der Ploeg, H. M., & Deeg, D. J. H. 2006 Cosmic transcendence and framework of meaning in life: Patterns among older adults in The Netherlands. *Journal of Gerontology*, **61B**, S121-S128.
- Brown, C., & Lewis, M. J. 2003 Psychosocial development in the elderly: An investigation into Erikson's ninth stage. *Journal of Aging Studies*, **17**, 415-426.
- Cumming, E., & Henry, W. 1961 *Growing old: The process of disengagement*. New York. Basic Books.
- Dalby, P. 2006 Is there a process of spiritual change or development associated with age-

- ing? A critical review of research. *Aging and Mental Health*, **10**, 4-12.
- Erikson, E. H., & Erikson, J. M. 1997 *The life cycle completed. Expanded edition*. New York: Norton.
- Flood, M. 2002 Successful aging: a concept analysis. *Journal of Theory Construction and Testing*, **6**, 105-108.
- Hauge, S. 1998 An analysis and critique of the theory of gerotranscendence. *Essay in Nursing Science*, Tønsberg, Norway: Vestfold College, *Notat 4/98*. URL: <http://www-bib.hive.no/tekster/hveskrift/notat/1998-3/>
- 星野和美 2006 老年後期における心理社会的発達としての老年の超越性－高齢者のライフ・ストーリーによる検討－. 人文論集－静岡大学人文科学部社会学科・言語文化学科研究室－, **57**, 35-42.
- Jönson, H., & Magnusson, J. A. 2001 A new age of old age? Gerotranscendence and the re-enchantment of aging. *Journal of Aging Studies*, **15**, 317-331.
- 内閣府 2007 平成 19 年度版高齢社会白書. ぎょうせい.
- 中寫康之・小田利勝 2001 サクセスフル・エイジングのもう 1 つの観点－ジェロトラセンデンス理論の考察－. 神戸大学発達科学部研究紀要, **8**, 255-269.
- Nilsson, M., Sarvimäki, A., & Ekman, S. L. 2001 Feeling old: being in a phase of transition in later life. *Nursing Inquiry*, **7**, 41-49.
- Piedmont, R. L. 1999 Does spirituality represent the sixth factor of personality? Spiritual transcendence and the five-factor model. *Journal of Personality*, **67**, 985-1013.
- Rowe, J. W., & Kahn, R. L. 1997 Successful aging. *The Gerontologist*, **37**, 433-440.
- Schroots, J. J. 1996 Theoretical developments in the psychology of aging. *The Gerontologists*, **36**, 742-748.
- Shaw, B. A., Krause, N., Liang, J., & Bennett, J. 2007 Tracking changes in social relations throughout late life. *Journal of Gerontology: SOCIAL SCIENCES*, **62**, S90-S99.
- Thorsen, K. 1998 The paradoxes of gerotranscendence: The theory of gerotranscendence in a cultural gerontological and post-modernist perspective. *Norwegian Journal of Epidemiology*, **8**: 165-176.
- Tornstam, L. 1989 Gero-transcendence; A Meta-theoretical Reformulation of the Disengagement Theory. *Aging: Clinical and Experimental Research*, **1**, 55-63; Milano.
- Torsntam, L. 1992 The Quo Vadis of Gerontology; On the Gerontological Research Paradigm. *The Gerontologist*, **32**, 318-326.
- Tornstam, L. 1994 Gerotranscendence -A Theoretical and Empirical Exploration. In Thomas, L.E., Eisenhandler, S.A., eds., *Aging and the Religious Dimension*, Westport: Greenwood Publishing Group.
- Tornstam, L. 1996a Gerotranscendence: A Theory About Maturing into Old Age. *Journal Aging of Identity*, **1**, 37-50.
- Tornstam, L. 1996b Caring for the elderly: Introducing the theory of gerotranscendence as a supplementary frame of reference for care for the elderly. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, **10**, 144-150.

- Tornstam, L. 1997a Gerotranscendence: The contemplative dimension of aging. *Journal of Aging Studies*, **11** 143-154.
- Tornstam, L. 1997b Gerotranscendence in a Broad Cross Sectional Perspective, *Journal of Aging and Identity*, **2**, 17-36.
- Tornstam, L. 1997c Life crises and gerotranscendence. *Journal of Aging and Identity*, **2**, 117-131.
- Tornstam, L. 1999 Gerotranscendence and the functions of reminiscence. *Journal of Aging and Identity*, **4**, 155-166.
- Tornstam, L. & Tornqvist, M. 2000 Nursing staff's interpretations of "gerotranscendence behavior" in the elderly. *Journal of Aging and Identity*, **4**, 155-166.
- Tornstam, L. 2003 Gerotranscendence from young old age to old old age. Online publication from The Social Gerontology Group, Uppsala. URL: <http://www.soc.uu.se/publications/fulltext/gtransoldold.pdf>
- Tornstam, L. 2005 *Gerotranscendence: a developmental theory of positive aging*. New York: Springer.
- Wadensten, B. & Carlsson, M. 2001 A qualitative study of nursing staff members' interpretations of signs of gerotranscendence. *Journal of Advanced Nursing*, **36**, 635-642.
- Wadensten, B. & Carlsson, M. 2003 Theory-driven guidelines for practical care of older people, based on the theory of gerotranscendence. *Journal of Advanced Nursing*, **41**, 462-470.
- Wadensten, B. 2006 An analysis of psychosocial theories of ageing and their relevance to practical gerontological nursing in Sweden. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, **20**, 347-354.
- Wadensten, B. 2007a The theory of gerotranscendence as applied to gerontological nursing -Part I. *International Journal of Older People Nursing*, **2**, 289-294.
- Wadensten, B. 2007b The theory of gerotranscendence in practice: guidelines for nursing -Part II. *International Journal of Older People Nursing*, **2**, 295-301.
- Wadensten, B. 2007c Adoption of an innovation based on the theory of gerotranscendence -Part III. *International Journal of Older People Nursing*, **2**, 302-314.